

R 6 . 1 2 . 1 5

第2号

通巻163号

# 学院通信

発行  
金光学院  
719-0111  
岡山県浅口市  
金光町大谷1486  
TEL (0865) 42-3115  
FAX (0865) 42-3114



教師養成機関創設130年記念式典 (合唱)

## 御取次を仰ぎて

学院長 大代 信治



残暑の厳しい中、夏期在籍教会実習から帰院し、五代金光様の本葬御用奉仕にお使いいただきました。御取次くださった前教主金光様のご葬儀では、おひざ元で修行をする学院生にとって、ご生前のお徳を偲び、お礼を申しながら新たな願いも生まれ、尊い時間を頂くことになりました。

教師養成機関創設百三十年のお年柄の中、ここまでの歩みを思い返しますと、本部広前には御六代にわたっていつも変わることなく歴代金光様が厳然とお座りになっていました。「本部広前の御取次を仰ぎ、終生の御用に立たしめ給わんことを祈りまつる」学院生に対して、日々の参拝をはじめ、迷い苦しんで御取次を頂き、おかげを頂いてお礼を申し上げるたびに、金光様のありのままのお姿が取次の何たるかを、折々のお言葉が道に生きる姿勢をお示しくございました。

ご立教以来、歴代金光様は教祖様に始まる生神金光大神取次の業をお伝えくださっています。その御取次ご祈念の中に、教師養成の営みがあり、先人の信心とご尽力によってここまでの百三十年の歴史があることを深く感じます。改めて厚く御礼申し上げる次第です。

起居一切を信行として、神様のありがたいこと、天地の尊いことに気づき目覚めていく日々は、「教祖様のご信心を生活に現すけいこを」と教主金光様が教えてくださり、御自らお取り組みでもあります。この道筋は「神人の道」につながり、天地の道理に基づいて神が助かり氏子の立ち行く世界へと導いてくださるものです。

入学以来半年を経て、各々、その時々、一人ひとりに修行があり、課題が見えてきます。そして、この神様に心を向けることで、生きた信心で生きた神様に会い、いつの間にかあいよかけよ立ち行く世界は身近にあり、今までの物差しでは計れないおかげがあることに気付かされていくのです。

言葉にすることは難しいですが、依って立つ道の根源を身にいっぱい頂き続けているのが、「学院」というご霊地での特別な尊い場であり、卒業後においても大切な時間なのだと思います。

こうした百三十年のお働きを受けて、ここまでに受けたおかげを思い返し、ご恩を知りご恩に報いる生き方へとお育てを頂きながら、全教のみ祈りに支えられて、いよいよここから修行成就、御用成就のおかげを蒙って参りたいと願っています。

# ここまでを振り返って

学院次長 秦 浩治

本科入学式から早七カ月が経ちました。慣れない黒衣や袴を身に着け、今までの生活とは違う日課に追われる学院生は、時間の経過と共に学院生活にも慣れてきて、それと同時に自分自身を振り返る時間ができ、改めて学院での修行の中身をそれぞれに自問自答している様子が伺えます。

私自身の学院生時代を思い返しますと、ちょうど今頃の時期、「このままでいいのか」との自分への問いが生まれました。ある日、学院の図書室で一冊の先覚の本に出会い、そこから親教会での修行を志すことになりました。その本との出会いがひとつの道を示してくれたように思います。先日、「教導」の授業でお越しいただいたある先生が学院生に向けて、教主金光様のお膝元で修行させていただけるありがたさについて話をされました。改めて、教主金光様が学院生の修行成就を御祈念、御取次くだされての学院修行だと、私自身のこととしても思わせていただ

きました。

去る十一月二十九日には、教師養成機関創設百三十年の記念日を迎え、

やつなみホールにて記念式典を執り行いました。百三十年の間、歴代金光様の御祈念、御取次のもと、全教のみ祈りとみ働きを受けて、教師養成のことが弛むことなく進められ、多くの卒業生が教師として道の御用にお立ちくださいていることは真に尊く、ありがたいことであり、改めて教師養成への祈りの深さを学院生、職員ともどもに感じさせていただく機会ともなりました。創設当初から今日まで学院では、全寮制を基本とし修行を進めております。二十四時間一緒に修行するという環境では、時に、学校や社会よりも深い問題が起こってくる

こともあります。特に個室での生活が普通となった今の人たちが



池掃除

には、

共同生活、自由な感じ、度合いも大きいので



求道の日 (金乃神道)

かと思えます。しかし、そうした中だからこそ、本部広前の御取次を頂きながら、自分を振り返り、神様に心を開けていくことができいくのだと思います。そして、そのことは、取次者としての姿勢が培われていく働きだとも思われます。

学院修行も残り四カ月となりました。「学院生活の願い」の中で「不断に御取次を頂きつつ、教祖に神習い、人間のあらゆる問題を信心の眼で洞察し」という言葉を毎日唱えさせていただいておりますが、まず自分自身の身の上下に起こる様々な問題に真剣に向き合うことを通してお育てを頂き、ここからの修行成就と卒業してからの御用成就をとともに祈らせていただきたいと思います。

## 日程

(冬期在籍教会実習まで)

8月	26	帰院式
9月	26	前教主金光平輝君本葬御用奉仕
9月	3	第一回 修徳殿入殿
9月	6	池掃除
9月	9	教話実習①
9月	12	修徳殿障子張り
9月	13	聖蹟巡拝(吉備路)
9月	19	学院・秋季霊祭 並びに物故職員報徳祭
10月	24	学院・秋季霊祭 並びに物故職員報徳祭
10月	26	生神金光大神大祭御用奉仕
10月	10/11	教学研究所見学
10月	15	学院・生神金光大神大祭 並びに創設百三十年御礼奉告祭
11月	17	第三回 求道の日
11月	1	第二十六回文化活動合同茶会
11月	13	第二回 定期考查
11月	17	聖蹟巡拝(寂光院方面)
11月	18	聖蹟巡拝(寂光院方面)
11月	23	青少年育成研修
11月	26	第二信心レポート懇談
12月	28	教師養成機関創設 百三十年記念式典
12月	29	直信教会参拝
12月	30	第四回 求道の日 (徒歩行・金乃神道)
12月	1	布教功労者報徳祭御用奉仕
12月	5	第二回 修徳殿入殿
12月	11	冬期在籍教会実習
12月	15	冬期在籍教会実習

# 「いっしょの歩み」

## ■聖蹟巡拝 (吉備路・寂光院方面)

教祖の事蹟に関わる地を訪ね、教祖の信心の足跡を辿るため、九月十九日に吉備路方面への聖蹟巡拝を実施した。まず、直信・片岡次郎四郎師の開かれた才崎教会に参拝し、教会長から「みきの信心」について教話を拝聴した。続いて、教祖四十二歳の事蹟に関わる西大寺観音院を参拝し、その後、吉備津神社では正式参拝の後、鳴釜神事を仕えていただいた。さらに、他宗教への理解を深めるため、本教と同じく幕末期に開かれた黒住教本部を訪れた。到着後、本部神殿に参拝し、説明を受



吉備津神社

け、毎日、朝日を拝む「日拝式」が行われる「日拝所」にもご案内いただいた。そして、黒住教学院の長恒彰浩学院長に黒住教の信仰や歴史、金光教との関連について講義していただいた。十一月十八日には大谷村の檀那寺である寂光院、氏神を奉斎する加茂八幡神社へ参拝した。寂光院では、本堂に



黒住教本部 (日拝所)



寂光院

て教祖の養家川手家先祖の法要が執り行われ、学院生一人ひとりがご焼香をあげさせていただき、川手家先祖、養父母の位牌も拝観させていただいた。

## ■修徳殿入殿

学院生入殿は、本部広前の修行生としての自覚を深め、教主金光様の御取次を頂くことの意義を再確認し、そのことを通して、お道の教師にお引き立てを願う者としての自覚が深まることを願いとして実施している。

第一回(九月)は、「教師志願の理由や、在籍教会・各家庭の信心の歩みをもとに、現在、どのような信心の流れの中にいるのかを確認する」ことを願いとして、さらに第二回(十二月)は、「ここまでの学院修行で学んだことをもとに、本教の信心生活について求め合う」という願いのもと実施した。輔導、副輔導の教導を頂き、また修徳殿という場のはたらきの中で、ここまでの学院修行を振り返り、それぞれに今後の課題を認識することができた。なお、来年三月には、卒業後を見据えての第三回入殿を実施する予定である。

## ■文化活動合同茶会

十一月十三日、学院広前において、第二十六回文化活動合同茶会が行われた。合同茶会は、前期を通して文化活動で習得してきた成果を発表し、ほかの講師の先生方にも触れ合い、ほかの文化活動に対する理解を深めることを願いとしている。

書道選択者は、それぞれが大切にする言葉を色紙に書いたものを展示し、その言葉に込めた思いを紹介した。典楽の奏楽では、様々な楽器が美しい音色を響かせ、さらに吉備舞奉納で観る楽しさを味わうことができた。茶道では、選択者が実際にお点前を披露し、季節を感じるお菓子とお茶が振る舞われた。和やかな雰囲気の中で、各担当の講師と交流も深まり、有意義な時間となった。



文化活動合同茶会

この半

年間、ご指導いただいた先生方には改めてお礼申し上げます。

# 教師養成機関創設 百三十年記念特集

## ■教師養成機関創設百三十年記念式典

明治二十七年十一月二十九日に、教師養成機関として神道金光教会学問所が創設され、その後、「教義講究所」「学院」と名称や形態の変遷を経て、本年度で百三十年のお年柄を迎えた。

創設記念日当日には、本部広前朝参拜の折、学院長が教主金光様にお礼のお届けをした。その後、午前九時半から金光北ウイング・やつなみホールで、記念式と記念講演を行った。

記念式では、学院長が、「創設以来、『日に日に生きるが信心なり』のみ教えの通り、日常の起居一切の内に神人共に生きる道の根源が貫かれてきたことを振り返り、百三十年の伝統にあつて変わることなく貫き現されてきたものを、確かに受け継ぎ、時を超えて全教が心を合わせて現し伝えてまいりたい」と式辞を述べた。

そして、教務総長より「二名の教員

とわずか数名の生徒に対しての授業から始まり、『このお道を世の中に広めるためには、まず人を育てる必要がある』という熱い思いを引き継いできた人々が努力と工夫を重ねて、神様のお働きの中で、人の果たすべき役割をしっかりと担い、こうして百三十年の記念式典を迎えることができた」とのこあいさつを頂いた。

その後、元学院長・堀尾光俊師(日田教会長)から「人 神を現す」と題して記念講演が行われた。堀尾師は、先覚先師が人材育成の上で、本部広前の働き、本部教庁の働き、そして、養成機関としての学院や修徳殿の働き、この三つの働き合いを大切にしてきたことに触れ、このお道における人材育成について話された。最後に、「教主金光様の御取次、御祈念を頂く中に、



記念講演

職員がそれぞれの持ち場立場で誠心誠意に取り組み、そして、全教の祈りと支えを受けて、学院生がかつがっお育てに相成る。そのお育てに相成る手伝いをさせていただき、学院生と共に学院長をはじめ職員がお育ていただく。それこそがこのお道であり、このことが百三千年間連綿と続けられてきた教師養成であり、これが狂わない限り永遠と続いていく」と締めくくられた。最後に学院生全員で「光り輝く道」を合唱した(写真は一面に掲載)。なお、来春、講演記録など掲載した記念誌を刊行する予定である。

## ■直信教会参拝

創設百三十年記念行事として、記念式典の翌日に直信教会参拝を実施した。教祖が取次専念後、唯一出向かれたとされる斎藤重右衛門師の開かれた笠岡教会の広前、神道金光教会学問所の創始者でもあり、学長や教義講究所長を歴任された佐藤範雄師が開かれた芸備教会の広前、そして、教祖が神より取次の頼みを受けられた翌年に初参拝したとされる高橋富枝師の開かれた六条院教会の広前へ参拝した(参拝順)。各教会では、初代の先生が頂かれた教祖の信心についての教話を拝聴し、初代にまつわる品なども拝見した。さらに、道中には、教祖が安政二年の厄年



芸備教会

に参拝し、佐藤範雄師が教団独立に関する相談に訪れた、沼名前神社へも参拝した。



沼名前神社

六条院教会



教団の草創期に、熱い願いを持って道の教えを広められた直信の先生方が御用にあたられた地や、『教典』にも掲載されている場所を訪れることで、授業等で聞いた教祖の事蹟、教団の歴史についての理解が深まると共に、時代を超えて、直信諸師の祈りやご苦勞に思いを馳せる一日となった。

■秋季靈祭・生神金光大神大祭

本部広前のご比礼を受け、学院広前において、九月二十四日に秋季靈祭、十月十七日に生神金光大神大祭が執り行われた。

この度は、学院創設百三十年の記念の年に当たり、靈祭に合わせて物故職員報徳祭を、大祭に合わせて創設百三十年御礼奉告祭を執り行つた。

物故職員報徳祭では祭典に先立ち靈神名を読み上げ、教師養成にご尽力された物故職員のお徳を称えた。



学院・秋季靈祭  
並びに物故職員報徳祭

創設百三十年御礼奉告祭では、創設以来今日まで、教師養成にかけられてきた願いが受け継ぎ現わされてきたこ

とにお礼を申し、ここからも一層、お道の教師がお育てになる働きが現れてくることを祈らせていただいた。

これらの祭典に臨むにあたり、学院生全員がそれぞれに、祭員や祭詞の起草・浄書、神饌物の調饌、奏楽など、一カ月ほど前から習礼や準備を行っていた。

初めての御用に戸惑う姿も見えたが、入学から今日までお育ていただいたことを活かし、神様、靈様への真心のお供えをさせていただいたのではないだろうか。



学院・生神金光大神大祭  
並びに創設百三十年御礼奉告祭

■創設百三十年記念書華道展  
本部広前の生神金光大神大祭に併せ

て、創設百三十年記念書華道展を開催した。文化活動の書道選択者が、それぞれ思いを込めた字を書いた半切と学院所蔵の先師の墨跡を展示した。

お年柄である本年は、四代金光様、五代金光様が創設の記念にお書き下げくださった色紙をはじめ、歴代の講師所長、学院長、講師の墨跡などを中心に展示し、来場者も熱心に見入っていた。



五代金光様によるお書き下げ

四代金光様および  
歴代講師所長・学院長の墨跡



# 学院生の

# 高!

## 天地はわが住みか



兵庫県・姫路教会  
竹部 拓真

学院での修行期間も半分以上が過ぎ

たある日、ふと、「卒業後、ご霊地から離れて信心させていたいただいた時、孤独感や寂しさを感じないだろうか」と考えることがありました。教主金光様のご祈念する後ろ姿を毎日拝し、安心と祈りの中で信行と学行につとめられるありがたさを感じる一方、卒業後のお道の教師としての姿を想像する時間が増えました。

そんな折、ご本部参拝に來られたハワイの信奉者の方々の懇談の場が設けられました。車椅子で来日されたご高齢の日系人女性と同じグループになり、私は次のような質問をしました。「御霊地から遠く離れたハワイで金光教を信仰され、寂しい思いをされるこ

とはありませんか？」ご婦人は言葉を噛みしめるようにゆっくりとこう答えました。「まったく寂しくないわ。だって天と地の神様がいつも私たちをお育てお守り下さっているでしょ。神様の働きがなければ、人は息もできない、食物は育たず私達は生きることができない。そういった神様のおかげに毎日感謝しているの。お礼を忘れずに生活していると、毎日とてもありがたくて幸せなのよ。」

人の姿をした神様が目の前にいるようでした。「天地金乃神の広前は世界中である」と言われたようでした。この天と地をわが住みかと頂き、お礼を申しながら信心させていたでいければ、どこに住んでいても寂しくなく安心なのだ、と気づかせていただきました。今こうしてご霊地



ハワイ区域の信奉者との懇談

でご修行させていただいていることに感謝し、ここからも世界中の皆様と一緒に信心を進めてまいりたいと思わせていただいております。

## 心の喜び



北海道・稚内教会  
中村 志保

九月の修徳殿入殿で、輔導、副輔導

の先生方に金光様を頂くことについてお尋ねした際、四代金光様の「理屈じやねえんじや、実感なんじや」というお言葉を教えていただきました。そのときから「実感」ということが私の学院修行でのテーマとなりました。

自分の力で生きていると錯覚できる今の世の中で信心させていただくのは、物事の本質を見失わないためではないかと私は思っています。そして、目に見えないものを信じるという不確かさを確かなものにするのは、「実感」なのではないかと思えます。有難い、嬉しい、悲しい、不安等の感覚は理屈では説明し難いですが、誰もが「実感」

として、確かに存在すると言うのではないかと思えます。「実感」を大切にして、学院修行に取り組む中で、日々様々な感情にならせていただきながらも、「せめてもの人のお役に立たせていただきたい」と願う方々が私の周りに沢山いてくださるこの環境が、大変有り難くなり、更には心地よく、その中にいさせてもらえる私自身のことでも好きになれます。今では、心の喜びを「実感」させていただけでいます。

ここからもいろいろなことが起きてくると思いますが、この「実感」を大切に、先を楽しみにして、学院卒業後にも人の為にどうかお役に立たせていただけます。すようにとの願いを持って修行に励ませてください。だいたいです。



第一回 修徳殿入殿